

東生野中学校 夜間学級に通う 86 歳

2023 年 3 月 1 日

好きな教科は数学。頭をこねくり回して解いた答えに、先生がくるっと赤丸をくれる。「あれが、うれしい」。音楽は「音痴だから」と少し敬遠ぎみ。体育は「体がえらいこつちや」。

安田承子さん(86)は、東生野中学校の夜間学級に通って 9 年になる。冬の教室。授業が始まるまで、柿色のぬくもりをともすストーブの前で腰かける。「うちの特等席」。足の先を温めているうちに、生徒が 1 人、2 人 と、席を埋める。午後 5 時半。校内にチャイムが鳴り、夜間学級の始まり。窓の外は夕暮れの気配が混じり、アジサイ色に暮れている。1 時限目は数学。小数の割り算。安田さんの好きな教科なのだが「せんせー、この(小数)点が邪魔して、ややこしい」と、眉間にしわ。教員が丁寧に説明してくれてはいるが、安田さんの頭の斜め上には、ポカンと疑問符が浮かんでいる。頑張れ、安田さん。教員が言う。「これ、去年も同じ問題やったの覚えてますか?」。「昨日のことも忘れとんのに、去年のことなんか覚えてへんわ」。他の生徒も「毎年忘れるから、先生も教えがいあるな」と続く。にぎやかに授業が進む。しばらくすると、配布されたプリントの問題とにらめっこが始まる。「できたー」と達成感に満ちた安田さんの声。すかさず先生が「裏面もありますよ」。プリントをひっくり返すと、口がへの字に曲がる。頑張れ、安田さん。

宵の色に染まったガラス窓が、教室を反射させる。真剣で楽しそう。そんな生徒たちの横顔を、優しく映していた。韓国の生まれ。8 歳の冬に、父の仕事の都合で関西へ渡った。当時は戦争の真っただ中。防空頭巾をかぶり、空襲警報におびえた。終戦になると、差別が待っていた。「チョーセン、イネ」。日本語が分からず、その音を覚えて帰り、後で「朝鮮、去れ」という意味だと知った。幼い心がキリリときしんだ。親の愛に触れた記憶がない。「おまえみたいなもんはいらん」。今も耳に冷たく残る声。学校へ行きたいとお願いすると「女に学校は必要ない」。教育を知らぬまま、少女は育った。縁談も親が決めた。17 歳で結婚。口減らしでやって来た嫁は、夫に歓迎されなかった。結婚 3 日目にして指輪を取られ、質屋に入れられた。「アホ」「クズ」。毎日、否定の言葉を浴びせられた。少しでも、しゃくにさわると、殴る蹴る。見境がなかった。「私なんかこの世にいらん人間なんやって、死ぬことばっかり考えとった」地域の創価学会員が訪ねてきた。「うちは死にたい人間やで、ほっといてくれ」。そう言うと、「冬は必ず春となります」と返してくる。はあ? そりや季節は変わるやろ。つっけんどんに追い返しても、また次の日にはやって来た。「必ず幸せにしてみせます」。その言葉に打たれた。1962 年(昭和 37 年)に入会。25 歳の冬だった。勤行の経本を開き、すぐに閉じた。文字が読めなかった。「一生かかってもできん」。同志は、雨の日も雪の日も、一日も欠かさず教えに来た。耳で覚え、何度も声にした。どこまでそらんじたのか迷子になると、同志が「ええ調子やったのに、元に戻ってるで」とつづいてくれる。1

年がかりで勤行を覚えた。忘れもしない雨の文化祭(66年、阪神甲子園球場)。隣の席の人が双眼鏡を貸してくれた。丸いレンズの中に、その人が、いた。「この人が、うちの師匠なんや」。池田先生が笑っている。ずぶぬれの原点となった。ある日、隣町の人に声をかけられた。「あんた、ここの家の後妻か」。あまりの変わりように別人に見えたという。腹の据わりが面立ちを明るく変え、どれだけ夫が荒れようとも、もう死を考える安田さんはいなかった。とはいえ、家の息苦しさは拭えぬまま。競艇で生活費を使い込む夫。不貞も働いた。離婚を何度も切り出したが、認めてもらえなかつた。同志が、願兼於業の法理を通し、あんたが願つてこの環境におるんやでと、教えてくれた。「こんな地獄、誰が願うんや！」。初めて食つてかかつた。救いは、わが子に対してはどこまでも優しい父であったこと。子どもさえ笑顔なら。それだけを喜びに踏ん張つた。何度も忍辱の鎧を脱ぎ捨てようとした。頭によぎるのは同志の面影。いつも御書を片手に勵ましてくれた。「鎌倉より京へは十二日の道なり。それをして十一日余り歩みをはこびて、今一日に成つて歩みをさしあきては、何として都の月をば詠め候べき」(新 2063・全 1440)。都の月はまだ見えずとも、大好きな題目と学会活動で、心の月をともした。

夫は闘病の末、63歳でこの世を去つた。最後の最後まで、ちらりとも優しさを見せてはくれなかつた。それでも安田さんは病床の夫に寄り添い、危篤の瞬間も耳元で題目を唱え、「お父さん、頑張りや」と声をかけ続けた。不遇を遠ざける器用さはない。体当たりで試練と取つ組み合い、七転八起で今日を越えていく。それが、この人の生き方なのだ。犬猿の夫婦と、安田さんは笑う。遠い昔、夫が「お母さんには感謝してるんや」と言つてはいたと娘から聞いた。ふんつと鼻を鳴らし、素直に喜べない自分がいた。「私も偏屈な人間やから、かわいい嫁やなかつたと思う」。それでも40年、添い遂げた。同じ道は二度と勘弁だが、人生に後悔はない。「あのおやじが、私をここまで鍛えてくれたんやからな」秘めたる夢があつた。幼き日にかなわなかつた「学校へ通う」こと。安田さんは、公立の夜間学級の存在を知り、迷わず手を挙げた。77歳での入学。初めて学びの門をくぐつた。

いつも愛車のシルバーカーで登校。校門の前に立つと、今でも心がふわりと躍る。ひらがなを覚え、漢字も書けるようになった。学ぶ喜びに、毎日、心が満たされた。クラスメートもできた。遠足や社会見学で一緒に四季を愛でる。季節の彩りに包まれ、若返つた気持ちになれた。農芸部に入部した。校庭の隅で土をいじり、旬の実りを育てる。きらきらと、世界が輝いて見えた。「いつになつたらその日が来るんやと、ずっとずっと追い続けた『幸せ』が、ようやくほほ笑んでくれたんよ」夢のような学校生活も、この春、卒業となる。ちよつぱり切ないこの感じが「青春っぽくて、ええよな」。冬から春へ。当たり前と思っていたその流れは、驚くほどに遠く長かつた。「でも、ちゃんと春は来たで」。86歳の乙女は今、やわらかな春の中にいる。